連載
スラウェシ
市民通信
⑤

# 一発即死――トラジャの闘鶏「パラミシ」

アンワル・ジンペ・ラフマン

最初に「闘鶏を見ようぜ」と誘ってくれたのは、タナ・トラジャ県のマカレ中央市場のあたりに住居兼店舗（訳注1）を持っている友人のアディだった。彼は「警察が摘発にやってきたときに、闘鶏の観客と鶏の持ち主がどれほどあわてて逃げ回るか」という話を得意になってしてくる。それに対して、私には「まあそんなものか」という感想しかなかったし、真面目に反応する気も起こらなかった。いつものことじゃないか、と心のなかでつぶやいていた。

だって、高校生の頃、友人と一緒に、ラッパン（Rappang）（訳注2）の川のほとりで行われる闘鶏をよく見に行ったものだから。今回誘ってくれたのはアディで、たしかに彼は闘鶏マニアの一人だ。彼の三階建の住居兼店舗の一角には、竹の鶏かごが備え付けてあり、そこでは、幼鳥から成鳥まで、地鶏、チャボ、野生の鶏、バンコク鶏（ayam bangkok）に至るまで、様々な種類の雄鶏ばかりが飼われていた。

当初、私自身は、彼の誘いに全く乗り気ではなかった。しかし、今回、トラジャを一緒に旅しているカナダから来た友人が「まだ闘鶏を見たことがないから、是非見に行きたい」と強くせがんだので、しかたなく、私も行くことにした。

## ●闘鶏の会場へ向かう

トラジャでの一日目は雨だった。我々はロンダ（Londa）とケテケス（Kete' Kesu）にしか行けなかった（訳注3）。二日目にようやくボル（Bolu）にある家畜市場へ行くことができた。アルビノ（白化型）の水牛（tedong bonga）（訳注4）やブヒブヒ鳴いている豚などを一時間ぐらい見てまわった後、バトゥトゥモンガ（Batutumonga）へ向かう乗合を待つため、橋のほうへ移動した。我々をサダン（Sadan）で行われる闘鶏に案内してくれるはずの友人アワルはなかなか現れず、もしかして来ないのではないかと気を揉んだ。ようやく乗合がやってきて、我々の前に停まった。

乗合のキジャン（訳注5）に乗ってから、我々はサダンへ向かうよう運転手に言った。席は一番後ろしか空いてなく、ぎゅうぎゅう詰めになりながら座った。

途中で、警察の車二台とすれ違った。一台は屋根にサイレンをつけたジープ、もう一台は荷台に警察官が座る長椅子を配置したミニトラックだった。これらの警察は、たった今、闘鶏の会場から戻るところのようだった。しかし、警察のミニトラックには警官以外の乗客は乗っていなかった。もしかしたら、お目当ての闘鶏はもう解散させられた後かもしれない。

一五分ほど乗車して目的地に着いた。しかし、我々の車は中まで入ることができない。道端に停められたバイクや車で道がふさがれているからだ。乗客はここで全員降りたのだが、私は思わず笑ってしまった。乗合の乗客たちの行く先は実はみな同じ、そう、闘鶏の見物だったのだ。

## ●にぎわう闘鶏会場

さっそく歩いて会場へ入った。思いがけない光景だった。そこではすでに、テンテン（tenteng）（訳注6）というお菓子、バケツに入ったウナギ（ブギス族から入手したものだとアワルやアディから聞いた）、若竹の筒に入ったバッロ（ballo）（訳注7）などの食べ物や飲み物を売る売り子たちが

闘鶏の対戦前の風景。左側の男性がバンダナ（ベケ）をつけている（Armin Hari 撮影）

道を埋め尽くしていた。ほかに、数字を当てるクジ（lotto）の売り子もいた。

会場の雰囲気は一般の市場のそれとほとんど変わらない。「よおっ、タバコ吸いたい人、一本一〇〇〇（ルピア）だよ」とタバコ売りの叫ぶ声が聞こえ、タバコが飛ぶように売れていた。

マカッサル海峡へ流れていくサダン川の河原まで下りていくと、そこには、屋根は防水シートで柱は竹のテントが、一つの小さいテントを囲むようにして建てられていた。そのテントの下では、腰に刀剣を結わえた一人の初老の男が、足踏みしながら、土地を平らにならしているところだった。会場周辺には、観客に踏まれてペチャンコになったビニール袋がたくさんあった。その土地はまるで苗床のようであった。

## ●雄鶏の闘い

ほどなくして、雄鶏の闘いが始まった。脚を縛った雄鶏を持った二人の男がテントの中に入った。二人のうちの一人には鶏の羽根を飾ったバンダナが実行委員会から渡された。すぐに観客はざわざわと騒ぎ出した。「ベケベケベケー、ベケベケベケー」とまるで雨季のカエルの合唱のような叫び声がテントに満ちている。観客は他の観客にカネを押しつけている姿が見える。これは賭けに誘っている様子である。

どうやら彼らの叫び声の意味は、バンダナ（ベケ）を与えられた人（パ・ベケ）を示しているようだった。そのバンダナ自体が、賭けに参加した者も観客も彼らが闘わせる雄鶏が誰の雄鶏か分からなくならないようにする印なのだ。しかし、二羽の雄鶏が持ち主の手から放たれた途端に、その叫び声は消えた。闘いが始まったのだ。

一方の雄鶏が他方へ的確に蹴りを入れるたびに、観客からは「おおーっ」という長い歓声が聞こえてくる。

闘鶏の賭けに参加しているのはどうも男性だけではないようだ。私が観戦していたテントには、年老いた女性や若い女性の列があった。彼女らは一緒に座って「ベケベケベケー」と叫び、女性どうしで、あるいは若い男性やおじさんたちへ賭け金を押しつけながら、自分に運を招き寄せようとしていた。

七回めの対戦のとき、ミルクコーヒーを味わいながら観戦していた私は、「うう―っ」という観客からの短くて太い一連の叫び声に驚いた。あまりに驚いたので立ち上がって、一体何が起こったのかを探そうとした。すると、闘っていた一方の白い雄鶏が一発喰らっただけで、もう即死状態になっていたのだった。「こりゃあ、いわゆる、雄鶏の蹴爪が白い雄鶏の心臓に命中したっていうことだな」とアワルが解説する。そのとおり。その白い雄鶏はそのまま倒れてしまったのであった。実行委員会が白い雄鶏の死骸に近づいて、蹴爪のついた脚の部分を切って、雄鶏の持ち主に渡した。そして、その死骸は勝者に手渡された。

## ●喪に服す家族を慰める伝統行事

パラミシ（paramisi）と呼ばれるトラジャの闘鶏は、それ自体、当初は、賭け事のない単なる闘鶏にすぎず、できる限りたくさんの人々を集めて、喪に服す家族を慰めるための行事であった。おそらく、トラジャの人々にとってのタクジアー（takziah）（訳注8）の一種なのだろう。

しかし、この伝統はその後「ビジネス化」されていったようだ。複数の人々の話によれば、たとえ喪に服す家族が闘鶏を行わなくとも、隣人が催したければ、闘鶏の開催は可能なのである。開催者が喪に服す家族から許可をもらい、テントの設営はもちろんのこと、催しが禁止されないように治安当局へあらかじめ支払うワイロの手配にいたるまで、パラミシの開催で生じる様々な事態を掌握できる能力がある限りにおいて、闘鶏の開催は可能になるのである。

公然の秘密なのだが、この闘鶏を開催する許可金として払う額は平均で約二〇〇〇万ルピア（約二八万円）である。しかし開催者は、対戦する雄鶏一羽ごとに五万ルピアの負担金をとって、高額な許可金の支払い負担を軽減する。闘鶏で対戦する雄鶏の数は合計で何十組にもなるので、何日もかけて開催されるのが普通である。

私が観戦したその日は、おおよそ午後二時半から四時半まで闘鶏が開催されたのだ

闘鶏の会場で賭け金を徴収する男（Armin Hari 撮影）

が、対戦したのは一二組だった。「うーん、ちょっと少ないなあ。多いとみんなで行列して待つし、休み時間も少ないのだけれど」とアワルが言う。

## ●蹴爪と羽根で雄鶏を選ぶ

二時間ほどの間に私が観戦した一二組の対戦では、一組につきわずか約一～三分で勝敗の決着がついた。なかには、前述の白い雄鶏のように、一分もかからずに勝敗が決まることもあった。しかし、雄鶏を育てて、闘鶏のために準備をするには、七カ月から一年もの長い時間がかかるのである。

都市で飼育する場合には、雄鶏は生後三カ月で群れから離して育てるのがよいとされている。農村で飼育する場合には、とくに問題は生じないようだ。

都市の雄鶏を群れから早く離して育てる必要があるのは、闘鶏のときに必要とされる能力、たとえば蹴る力や羽ばたきの力を高めるのに必要な広い場所が確保できないからである。雄鶏が日々食べるエサにまで注意を払うためでもある。一方、農村で飼育された雄鶏は話が違って、とくに苦労することはない。農村には栄養価の高いエサが豊富にあるからだ。「鶏にも動き回るための広い場所が必要で、それでもって体ができあがってくるのさ」と闘鶏用の雄鶏を飼育するアワルは言う。

体が大きくなって闘えるようになると、蹴爪と羽根の様子をもとに、もう一度雄鶏を選抜する。三本の小さな蹴爪のなかの大きな蹴爪、あるいは三本の大きな蹴爪のなかの小さな蹴爪、これをアディは強力な蹴爪と呼んでいる。この蹴爪こそが雄鶏の蹴りの力を決めるからである。羽根についても同様である。ジョグジャカルタのある大学を中退したアディによれば、敵に対面したときに勝敗を決める特別の羽根があり、「だから羽根で負ける（kalah bulu）という表現がある」と付け足す。

ほかに、同じように重要なのは、雄鶏自身の動きの傾向である。たとえば、最初に高く飛び上がった雄鶏は最後まで力が持たないとよく言う。高く飛び上がると、闘うときに危険が大きくなる。なぜなら、その雄鶏の後に敵の雄鶏が飛び上がり、その相手の蹴爪で胸に一撃を受ける可能性が高くなるからである。胸の部分は最も攻撃を受けやすい場所なのである。

## ●あの白い雄鶏は…

急にアワルがトラジャ語でアディと話し始めた。アディが出かける前に友人に売った雄鶏もパラミシに参加している、という話だった。そういえば、アディの住居兼店舗の前で、薄青のジャケットを着たひげ面の男が、一羽の白い雄鶏をジャケットの中に入れているのを私は見た。「ああ、あの雄鶏ね。闘う前にすぐ飛んじゃうから売ってしまったんだ」とアディは言った。雄鶏は一九万ルピアで売れたそうだ。

またアワルがしゃべり出す。さっき、サダンで一発即死の雄鶏を見たかと聞くのだ。「ああ、あの白い奴だろう?」と私が相づちを打つと、「そう、あれが昨日アディの売ったやつさ。君が着いたときに住居兼店舗の前に座っていただろ」とアワルは声を荒げた。ああ、やっぱりそうだったのか。

（Anwar Jimpe Rahman ／インドネシア出版社代表・詩人）

（訳注1）二階以上は住居（rumah）、一階は店舗（toko）という建物で、両者を組み合わせて短縮化したルコ（ruko）と呼ばれる。南スラウェシ州マカッサルは別名「ルコの町」と称されるほどである。

（訳注2）南スラウェシ州シドゥラップ県にある商業の中心地。「シドゥラップ」という県名は、行政の中心パンカジェネのあるシデンレン地区と商業の中心ラッパン地区の頭文字を合わせて短縮化したもの。

（訳注3）ロンダもケテケスもトラジャの有名な観光スポット。ロンダは巨大な岩に横穴をあけて棺を納める岩石墓地で、ケテケスはトラジャの伝統家屋トンコナンと木彫製作の集落として知られている。

（訳注4）白黒斑の水牛のうち、とくに白い部分の多い水牛は神の使いとして尊ばれ、値段が高くなる。水牛は一種の貨幣として扱われ、トラジャで有名な葬式の際にはたくさんの水牛が生贄として屠られる。

（訳注5）乗合などに使われる多目的利

雄鶏の脚にするどい刃物を結えつけている
（Armin Hari 撮影）

用可能な商用車で、日系企業がインドネシア市場向けに生産してきた。本来のキジャンはインドネシア語で小鹿の意味。最新型のキジャン（イノーバ）は、国際市場を睨んでインドネシア以外でも生産される。

（訳注6）トウモロコシの皮に包まれたキャラメル状のピーナッツ菓子。

（訳注7）トゥアッ（tuak）とも呼ばれる椰子酒。長い竹筒に入れ、売り子がそれを担いで市場などを売り歩く。

（訳注8）イスラームの言葉で、喪に服す家族を慰問すること。

## 〈訳者による解説〉

筆者のアンワル・ジンペ・ラフマンは、小さいが、良質のスラウェシ社会文化に関する書籍を出版することで知られるイニンナワ出版社（Penerbit Ininnawa）の代表を務めており、また若手の詩人としても知られている。パニンクルへの投稿執筆も常連で、たとえば、意味の分からない看板や垂れ幕への批評など、対象を冷めた目線でとらえる彼独自の文体に人気がある。

今回、彼が取り上げたのは、パラミシと呼ばれるトラジャの闘鶏である。闘鶏自体は、東南アジア全般でよく見かける娯楽の一つである。日本でもかつて闘鶏はあり、地鶏で有名な比内鶏などの軍鶏系の雄鶏はもともと闘鶏用に飼育されてきた。

トラジャの闘鶏も、フィリピンなどのように、ナイフを雄鶏の脚に括りつけて闘わせるという形で行われるようだ。また、雄鶏のなかでは、タイを起源とする体の大きいバンコク鶏が最も強いと一般に認識されている。闘鶏用の雄鶏は、他の鶏とは別の鳥かごに入れられて大切に飼育されるので、農村に行ってもすぐ分かるはずである。

他国でもそうだが、闘鶏は一種の賭博行為と見なされることが多く、トラジャでも警察が取り締まりに目を光らせている。それでも、闘鶏がなくなる気配はない。人々は、警察の目を盗んで、闘鶏の見物へ出かけていくのである。おそらく、警察や軍が後ろ盾になって闘鶏が行われている面もあるだろう。闘鶏の会場では多額の現金が動いているのである。

闘鶏の会場での多額の現金のやり取りに鑑みると、本当に闘鶏に関わる人々は貧しいのだろうかという疑問を覚える。日本的に考えれば、貧しい家庭の父親がタバコ代やギャンブル代を節約し、コツコツと小銭を貯めて、何とかして子どもを学校へ行かせてあげる、といったイメージが湧く。そういう人々もきっといるのだろうが、闘鶏の会場に集まって賭けをする人々は、生活に余裕がなくとも、闘鶏の会場で賭けをするのである。闘鶏で一攫千金を狙っているのかもしれない。しかしそうした悲壮感に満ちている様子でもないようだ。おそらく人々は闘鶏が好きだし、楽しいのである。たとえ闘鶏でお金を摩ったとしても、大家族のなかで何とか食べて生きていくことはできる。そんな安心感を受けるのである。

トラジャの人々は、大規模な葬式などあの世に関わる部分で多額の資金が必要になる。現世の部分にかかる資金を節約してでも、葬式費用を用意しなければならない。それでも、闘鶏をやめて節約することはしない。おそらく闘鶏は、少なくとも葬式を盛大に執り行うトラジャの人々にとって、生と死についての何らかの感覚を研ぎ澄ませるある種の「儀式」なのかもしれない。

かつては闘鶏が盛んに行われたという日本で、今や闘鶏を見ることはほとんどなくなった。ゲージに入れられて身動きするスペースもなく、化学飼料を与えて、鶏をあたかも工場の製品のように扱い、毎日の食卓への安定供給を達成し、それを消費する日本の私たち。一方、日常をしばし忘れ、飽きることなく、鶏の野生を呼び覚ませる闘鶏に熱中するトラジャの老若男女。人間と鶏との関わり方は、これからどう変わっていくのだろうか。

ご存知の通り、鳥インフルエンザで最も危険視されている国のひとつがインドネシアである。近年、政府は盛んに住民に対して鳥インフルエンザへの注意を喚起し始めた。しかし、それが理由で闘鶏を止めたという話を、まだ聞いたことがない。

（まつい　かずひさ／在マカッサル海外調査員）